九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Überfremdungについて : 一つの報告

西田, 越郎

https://doi.org/10.15017/2332790

出版情報：文學研究. 65, pp.5-12, 1968-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

Überfremdung について

——一つの報告——

西　田　越　郎

現代ドイツ語をめぐる問題にはさまざまなものが考えられるであろうが，その二三を拾ってみると

1) modernes Deutsch に即応した Grammatik の確立．1959年に刊行された Duden の „Grammatik der deutschen Gegenwartssprache“ はある意味においてその要望にこたえたものと見ることができよう．しかしそれは諸傾向をいわば無評価に網羅しすぎた憾みがあり，未だ本格的な Grammatik というには程遠いといわねばならない．いわゆる gestalt- und inhaltbezogene Sprachbeschreibung の上に立ち，詞論をも含めた詳細にして wissenschaftlich な文法が樹立されねばならない．この文法樹立のための努力が，結局現代ドイツ語におけるアクチュアルな変化に絶えず観察の目を向けることにつながるのである．

2) ドイツの東西分割によるドイツ語の分裂の問題．ドイツが東西に二分されたことによって，この事態が生ずるであろうことは既に予測されていたことであるが，近来この問題に関する研究（特に „Volk“ の概念内容についてなど）も次第に見られるようになって来た．西の学者に言わせれば，東ドイツではある種の単語は消されて新語に置きかえられ（例えば Volkspolizei），また消されないまでも語の概念に変更が加えられる事態が起っている．これが表面的に，ただ政治的な Sondersprache，いわゆる Funktionärsprache にとどまっている間は左程のことはないが，次第に言語の深層にまで滲透してくる場合，やはり重視せざるを得ないのではなかろうか．これは結局 Sprachregelung にかかわる問題であり，言語の Freiheit と Lenkung という根本的なテーマにまで発展する可能性

を含んでいるように思われるのである．

3) Hugo Moser が力説する Sprachnorm に関連して，語彙のみならず，Syntax においても現代ドイツ語の単一化，単純化の現象が著しいことである．たとえば新語が Alltagssprache から Hochsprache へ急速にとり入れられることによって，両者の差異が次第に薄れつつあるこなどは見逃せない現象である．

この小論では現代ドイツ語において外来語の占める位置と，外来語の及ぼす影響について若干の紹介を行ってみたい．

第二次大戦終結後，おびただしい外国語，特に Anglizismen が流入してきたことは，ドイツとてその例外ではない．外国語の氾濫についてはわが国でもしばしば論議され，これをことばの乱れの一現象とみて，その危険を強調する人もある．最近のドイツの新聞，週刊誌には Computer をはじめとし，ベトナム戦争に関連して現われた Eskalation にいたるまで数えあげればきりがないが，殊に広告部門，Illustrierte などにおいて外国語が無やみに使用されていることは，わが国と事情の異なるところはない．

ドイツにおいては一般に新語が辞書に採用されるまでには，早くて10年を要すると言われている．すなわち一時的な流行語ではなく，必要やむを得ざる，またドイツ語への言い換えのきかないものが定着してはじめて新語として辞書へとり入れられることになるのである．しかし近来は，はじめにも述べたように，新語が Alltagssprache から Hochsprache へ上昇するテンポが速くなり，殊に外来語の場合には Hochsprache への影響が懸念されるようになって来たことは注目されてよいであろう．

ところで数年前（1963）パリ・ソルボンヌの René Etiemble 教授は一書を著わして，Parlez-vous Franglais？（Sprechen Sie Frenglisch？）というセンセーショナルな問いをフランス人に投げかけた．ことはフラン

スにおける Anglizismen の氾濫に業をにやした教授が本書によって怒りをぶちまけた次第なのだが，それから間もなくこれに対する反論が Figaro 紙に寄せられ，また同紙が読者にアンケートを求めるというようなことも手伝って，一時話題をさらったことがある．これはあるいは当時いち早くわが国にも紹介されたかもしれない．

エチアンブル氏は次のような話を披露する．すなわち full-time もしくは part-time で，ある調査所の仕事を引受けている彼の pal (=Freund) の short story という設定である．この男は businessman でもなく，またシテの boss と glamorous balletdancer の間にできた私生児でもない．playboy でもなく，bestsellers の作家でもない．romance, petting, callgirls などにはおよそ見向きもしないという男である．かくて，ありきたりの酒場へ出入りしているが，ここでは starletts, covergirls, bobby-soxers (=Teenager) にお目にかかれる．そしてこの連中はみな drink を口にしているのである．さてこうした或る日のこと，彼はサハラ沙漠から帰ったばかりの jet-clipper 乗務の stewardess に出会う．彼女は non-stop 飛行のこと，乗客の rush ぶりのこと，またサハラで活躍する bulldozers や pipelines, motel などについて語る．友人は彼女をシャンゼリゼの drug-store に誘い，hamburger または ketchup をふりかけた hot dog と soft drink をごちそうする等々．

こう書いてくると，日本ではこれくらいの外来語はすでに日本語になっていて，今さら驚くにはあたらぬではないかということになるが，エチアンブル氏にとってはこれがどうにも腹にすえかねるのである．氏は更にテレビ・ラジオから comic-strips の作者にいたるまで，le franglais なるビールスに感染してしまったと言い，またフランス人は元来英語の正確な発音や表記には無関心なために，英米人にも理解不可能な新語をつくり出す始末で，Phonetik の面ではまったくの無政府状態に陥ってしまったと嘆き，その例として sheriff（保安官）には十数種類の異なった表記のあることを報告している．upper-cut を受けた作中の主人公の発する悲鳴

制はすべて英語で行われることになっているからである．

通信機材をはじめとし，戦車，艦船などには英米両国から供与されたものも多く，その部品の名称表示は英語が大半を占め，操作の解説書なども英語のテクストのものが多いという．その結果，ドイツで生産される戦車にも，いまだに英語による表示が使用されているものがある．たとえば mounting (=Grundplatte für Geräte), sprocket (=Antriebsgrenze) など．通信部門では次第にドイツ語に置き換えられつつあるが，それでも transmit, low, high, switch, karabrieren (=auf Schwebungslücke gehen) などが英語のまま残されているし，武器の名称にも rifle, colt がそのまま用いられ，また砲術関係ではレーダーによる plotting board が広く使用されているという．

将兵の階級表示においても Commander, Major, Sergeant, public relations officer（渉外・広報担当将校）などの名称が見られるし，将校の場合，「飛行命令」に対しては一般に briefing なる語が使用されるということである．

海軍においては，無線電話による通話はまず "How do you hear me ?" ではじまり，"I hear you loud and clear." —— "I have a message for you." ——"Over." と続いて，その後ようやくドイツ語による通話が開始されるのである．

一般に空軍において Überfremdung がはなはだしいことは先に述べたが，海軍航空隊は特にそれが著しく，Moser は次のような例を挙げている．

Er hat das Flugzeug an der „line". (=bereit)

Er ist in der „Base-Ops". (=Flugabfertigung)

また „Tower" (=Kontrollturm) との通話で

„Wann unterbrechen wir den continuous talk ?"

„Da ist ein trouble mit dem resister." (=Widerstand)

ここで問題になるのは発音の乱れで，これはパイロット自身の教養によ

っても左右されるが，to circle (=kreisen) が „söökeln“, roger (=verstanden) が „rotscher“, また casualty (=Unfall) が „käselti“ となるが如きである．

Bundeswehr における英語の滲透度は上に見るように相当深刻なものがあるが，Moser は技術時代における Haupt- und Verständigungssprache として英語の使用は避けられないだろうことを一応認めた上で，なおかつ，ドイツ語の純正を保つためには，なにをなすべきかと問うている．Bundeswehr 当局の，また各個人の熱意と努力によっては，現在使用されている英語の多くはドイツ語に置き換えることができるだろうが，ただパイロットが前記 briefing を英語のみによらずに，既に大部分ドイツ語で行っているのに，なぜ to circle を kreisen と言い換えないのか不可解であるというのが Moser の見解である．

更に注目をひくのは，英語の動詞がそのままドイツ語風に活用されていることであろう．例えば to beach (=landen) から過去分詞 „gebiitscht“ が，to crash (=abstürzen) から同じく „gekräscht“ が造られることである．かくして

„Ich bin um zwölf Uhr ofgeteikt.“ (<to take off = abfliegen)

という奇妙な表現が生まれることになる．

このような表現が単に勤務中にのみ，すなわち Dienstsprache としてのみ使用されるならば，さして憂慮するには当らないかもしれない．ところがこれが Alltagssprache として使用されるおそれが多分にあるといわれている．空軍ならびに海軍航空隊では，Alltagsjargon として verstanden というべきところを „roger“ または „wilco“, nein を „negative“, ich verbessere を „correction“ というのが普通になっているといわれる．

„Hoffentlich ist das bald over.“ (=vorbei)

„Laßt uns einmal darüber tooken.“ (<to talk)

„Wann draiwen wir zum Essen?“ (<to drive)

„Wir wollen muwi angucken.“ (=ins Kino gehen)

のような会話がかわされることになると，やはり一抹の不安を覚えずにはいられないであろう．

このような Mischsprache が基地あるいは隊内にとどまっている限り心配の要はないが，Moser がもっとも憂慮するのは，Dienstsprache から一歩進んで家庭内に持ち込まれた場合のことである．現在はまだ隊門で食いとめられているが，果してそれがいつまで可能か，それは予測できないことであろう．Moser は家庭にあるパイロットが，ラジオの抵抗器が故障すれば resister ではなく Widerstand というであろうことを確信している．

しかし Sprachmischung の現象が隊内から家庭へ，家庭から更に一般の Hochsprache や Alltagssprache へ波及して，意外な結果を産まないとはいえないのであって，かかる危険性の存在することだけは確認しておく必要があろう．英語を使用することが，ある部門では避けがたいとすれば，Bundeswehr 当局は英語とドイツ語の使用区分を明確にし，可能な限り分離すべきであり，英語による表記とドイツ語による表記について充分な知識を将兵に与えるように努力すべきであるというのが，この言語調査によって得た Moser の結論である．